

## 青年期における回想と自我同一性および心理的適応の関連<sup>1)</sup>

野村 信 威                      橋 本   幸  
大阪人間科学大学人間科学部      同志社大学文学部

近年、高齢者の心理的なケアのニーズから回想法への関心が高まっているが、しばしば青年期でも頻繁に回想が行われていることが指摘されている。本研究では個人の心理・社会的発達の違いが日常的な回想と異なる関連をもつ可能性を検討するため、Marcia (1966) の同一性地位による青年期の日常的回想の特徴や心理的適応の違いを検討した。さらに、縦断的データから回想と心理的適応間の相互的な因果関係について検討した。

大学生、看護学校生、専門学校生 190 名 (平均年齢 21.5 歳) に対して、同一性地位判定尺度 (加藤, 1983) などからなる質問紙調査を実施した。その結果、過去の危機と回想の頻度や否定的感情を伴う回想の間に有意な相関が認められたものの、パス解析の結果では同一性地位が回想に及ぼす影響は認められなかった。また頻繁な回想は精神的健康度を低める一方で、自尊感情の低さは頻繁で否定的感情を伴う回想を促し、適応指標間で異なる回想の影響が示唆された。

キーワード：回想、自我同一性、青年期

### 問 題

回想とは、過去のさまざまな出来事が自然にあるいは意識的に想起される心的過程である。人生の発達段階のうち、回想は老年期において重要な意味をもつ可能性が Butler (1963) によって指摘された。Butler は、老年期に行われる回想を、過去の未解決の葛藤を解決するよう促す自然で普遍的な心的過程だと考え、この過程をライフレビュー (life review) と名付けた。回想は Erikson (1950 仁科訳 1977) の心理社会的発達段階理論における老年期の発達課題「自我の統合」を達成する具体的手段のひとつと考えられており、これまでに高齢者が過去を回想することによって心理的適応が高

まる可能性が指摘されてきた (例えば野村, 1998 ; 黒川, 2005 ; 野村・橋本, 2006)。

しかしながら、回想は人生のあらゆる時期で自発的に生じる心的活動であり、青年期には老年期と同程度あるいはそれ以上に頻繁に日常的に回想が行われることが報告されている (Webster, 1993 ; 長田・長田, 1994 ; 野村・橋本, 2001)。

また Ando (2003) は、大学生に 4 週間にわたって互いにライフレビューを行わせ、その適応的効果を検討した結果、自尊感情の改善や身体的症状の低下が認められ、回想が青年にとっても心理的適応を高める効果をもつ可能性を指摘した。そのため、回想を行うことによる適応的効果は老年期にのみ認められるのではなく、青年期などの他の発達段階でも有効である可能性がある。しかしその一方で、回想による適応的効果は老年期に特有のものであり、他の年代では必ずしも心理的適応を高める有意義な行為ではないかもしれない。個人

1) 本論文は日本心理学会第 66 回大会 (於：広島大学) および日本健康心理学会第 15 回大会 (於：早稲田大学) において発表されたものに加筆、再分析を加えたものである。

の回想の特徴やその心理的意義が発達段階によって異なる場合には、以下のふたつがその理由として考えられる。第一に、実際の暦年齢やそれに伴う想起された過去と現在との時間的隔たりの違いによって回想の心理的意義が異なる可能性である。第二に、個人の心理社会的発達の相違によって回想の意義が異なる可能性である。

そこで本研究では、後者の可能性について検討するため、青年期の発達課題である自我同一性の確立 (Erikson, 1950 仁科訳 1977) を取り上げ、青年期の同一性の違いが個人の回想の特徴とどのような関連をもつのかを検討する。自我同一性は乳児期から老年期にいたる人生で重要な心理的発達の指標として位置づけられる。また自我同一性はライフサイクル全般にわたって繰り返し再体制化されるという指摘もあり (岡本, 1985), 青年期の回想の意義を自我同一性との関連から検討することは重要だと言える。

青年期の自我同一性を検討する代表的な方法のひとつに Marcia (1966, 1967) によるアプローチがある (レビューとして 鑑・山本・宮下, 1984)。Marcia による同一性地位 (identity status) 理論では、自我同一性の達成は、職業や理念とすべきイデオロギーなどのいくつかの重要な選択の間で真剣に悩みながら決定した期間である危機 (crisis) の経験と、自分自身の明確な信念に基づいて積極的に関与し行動する自己投入および傾倒 (commitment) の有無という2つの基準から判定され、半構造化面接により、同一性達成、モラトリアム、権威受容、同一性拡散の4つの地位に類型化される。

青年期の同一性地位と回想との関連についてはこれまで報告されていない。その一方で、回想される事象そのものに焦点を向けた記憶研究では同一性との関連が指摘されている。

植之原 (1993) は、自己の問い直しと過去の経験の意味づけが青年期の同一性達成過程で行われるという仮定のもとに、過去の経験の記憶である

「事象の記憶」と同一性地位の関連を検討した。その結果、同一性達成群が示す「事象の記憶」は経験に忠実ではなく再構成されており、現在の自己との関連が高かった。この結果より植之原は、同一性達成過程では過去の記憶が繰り返し参照され現在の自己との関連が深まると推測した。

Neimeyer & Metzler (1994) は同一性地位と自伝的記憶の想起過程を実験的に検討した。自己イメージに合致しない性格特性語から連想される過去の行動を想起するように調査協力者に求めたところ、同一性達成地位とモラトリアム地位では自己イメージに合わない多くの出来事が想起された一方で、権威受容地位では自己イメージに合わない出来事の想起は抑制されたことを認めた。

これらの指摘はいずれも記憶研究における結果であり、前述したように回想と自我同一性との関連はこれまで直接検討されていない。しかしながら、自伝的記憶の想起として回想を位置づけた場合、青年期に自我同一性が達成されている場合は、より頻繁で豊かな回想が行われる可能性がある。

また、自我同一性の概念それ自体からも回想との関わりを推測できる。しばしば同一性が確立される過程では「私とは何者か」という問いかけがなされ、「個としての自我がどこからどこに向かって発達していこうとしているのか (鑑他, 1984, p. 36)」を明確にしようと試みられる、時間的な意味をもつ過程だとされる。そのため同一性が確立される過程では、現在や未来の自分について思い巡らすばかりでなく、過去の自分を想起して批判的に振り返る行為を伴うものだと考えられ、Butler (1963) のいうライフレビューと同様の心的過程を経験している可能性がある。

そこで、本研究では青年期の同一性地位と日常的な回想との関連について探索的な検討を試み、以下の可能性について検討することを目的とした。研究1では、青年期には同一性地位により日常的回想や心理的適応に異なる特徴が認められ、同一

性が達成した青年はより頻繁な回想を行うかどうかについて検討を試みた。また研究2では、青年期に日常的に行われる回想は心理的適応を高める効果をもつかどうかについて検討を試みた。

## 研究 1

### 目的

研究1では青年期にあたる大学生を対象とした質問紙調査を実施して、青年期には同一性地位により日常的回想や心理的適応に異なる特徴が認められるのか、また自我同一性の達成した青年はより頻繁な回想を行うかどうかを検討することを目的とした。

### 方法

**調査協力者** 京都府内にある4年制大学、看護学校および福祉系専門学校で心理学関連科目を受講する学生を対象に質問紙調査を実施した。回答したのは204名だったが、分析では青年期に該当しないと考えられる30歳以上の者14名を除外した。その結果、調査協力者は大学生群93名（男性30名、女性63名）、看護学校群45名（男性11名、女性34名）、専門学校群52名（男性21名、女性31名）で、合計190名（男性62名、女性128名、平均年齢21.5歳、標準偏差2.6歳）だった。

**手続き** 講義時に質問紙を配付して、主として1週間後に回収した。

**質問紙** 自我同一性の指標として同一性地位判定尺度（加藤，1983）を用いた。この尺度は Marcia (1966) の同一性地位の考えに基づいて作成され、過去の危機、現在の自己投入、将来の自己投入希求の3つの下位尺度からなる。「私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない」や「私は今、自分の目標をなしとげるために努力している」などの項目に対して、「全然そうではない（1点）」から「まったくそのとおりだ（6点）」の6件法で回答を求め、下位尺度の得点の組み合わせによって「同一性達成地位（過去

の危機も現在の自己投入も高い）」、「権威受容地位（過去の危機は低く現在の自己投入は高い）」、「積極的モラトリアム地位（現在の自己投入は低く将来の自己投入希求は高い）」、「同一性拡散地位（現在の自己投入も将来の自己投入希求も低い）」、そしてA-F中間地位（同一性達成と権威受容地位の中間）とD-M中間地位（積極的モラトリアムと同一性拡散地位の中間）のいずれかに判定される。

回想に関する尺度には、長田・長田 (1994) による回想尺度を回想の頻度の指標として用いた。日常場面において過去を考える頻度を測る8項目の尺度であり、「以下にあげるさまざまな時にあなたはどれ位昔のことを考えますか」という教示を与え、「ひとりでいるとき」や「寂しさを感じたとき」、「ひまなとき」などの項目に対して過去を「よく考える（4点）」「ときどき考える（3点）」「あまり考えない（2点）」「考えない（1点）」の4件法で評定を求める。尺度の内的整合性を示す Cronbach の  $\alpha$  係数は.722であり、項目-尺度間相関の著しく低い項目はなかった。各項目の評定値の平均は1.60-3.11の範囲になり、8項目全体では2.41だった。

また、回想の質的特徴の指標として、野村・橋本 (2001) による肯定的回想尺度、否定的回想尺度、再評価傾向尺度を用いた。肯定的および否定的回想尺度は、回想に伴う情緒的な性質、すなわち「回想に伴うポジティブまたはネガティブな感情や認知の程度」を測定する。「過去を思い出すのはとても楽しい」「思い出すのがつらいことがある」などの項目に、「そう思う」から「そう思わない」の5件法で評定を求めた。本研究では肯定的回想尺度12項目のうち因子負荷量の高い6項目のみを抜粋し、短縮版として用いた。短縮版の項目の内的整合性を示す Cronbach の  $\alpha$  係数は.862だった。否定的回想尺度は6項目をそのまま使用した。

再評価傾向尺度は「過去のネガティブな経験を

再評価する傾向」を測定する 5 件法 12 項目の尺度である。これらの指標は日常場面における個人の回想のスタイルや特徴を測定するために使用した。

これらに加えて、精神的健康の指標である日本版 GHQ28 (中川・大坊, 1985) および自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) の日本語版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。日本版 GHQ28 は身体的症状, 不安と不眠, 社会的活動障害, うつ傾向の 4 つの下位尺度を含み, 過去 2 週間のうちに様々な身体症状などの有無や程度について 0 から 3 点の範囲で評定を求める。得点の高さは精神的健康度の低さを表す。自尊感情尺度は, 自分自身について「これでよい」と思う程度を測定する尺度であり, 5 件法 10 項目からなる。日本版 GHQ28 や自尊感情尺度は一般成人の心理的適応状態の測度として広く用いられており, 適応指標として用いることは妥当だと考えられた。

## 結果と考察

分析には統計パッケージの SPSS ver. 12.0 for Windows を用いた。はじめに同一性地位判定尺度に対して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行って尺度の内的整合性を検討した。因子数を 3 に指定した結果, 加藤 (1983) による下位

尺度とはやや異なる因子構造が認められた。そのため因子負荷量が 0.4 に満たないかオリジナルとは異なる下位尺度に含まれた 4 項目を削除して, 再度同様の因子分析を行った結果, 現在の自己投入 (4 項目), 過去の危機 (3 項目), 将来の自己投入希求 (2 項目) の 3 つの下位尺度が認められた<sup>2)</sup>。因子間相関は, 現在の自己投入 - 過去の危機間で .066, 現在の自己投入 - 将来の自己投入希求間で .498, 過去の危機 - 将来の自己投入希求間で .337 だった。一方 Cronbach の  $\alpha$  係数は, 現在の自己投入で .791, 過去の危機で .491, 将来の自己投入希求で .614 であり, 過去の危機では尺度としてのまとまりに問題があると考えられた。しかしながら, 本研究では加藤による構成概念とその項目を尊重し, 過去の危機の 3 項目を単一の下位尺度として用いた。

さらに, 本研究では同一性地位間の特徴の違いを統計的に検討するため, 各下位尺度の中央値に基づいてそれぞれ cutoff point を設定した。各下位尺度については, 現在の自己投入では 16 点以下と 17 点以上で分けた。過去の危機では 13 点以下と 14 点以上で分けた。将来の自己投入希求では 7 点以下と 8 点以上で分けた<sup>3)</sup>。各下位尺度の得点分布は, 現在の自己投入が 4-24 点, 過去の危機が 4-18 点, 将来の自己投入希求が 2-12 点だった。そして現在の自己投入と過去の危機の得点がいずれも高い場合には同一性達成型に, 現在の自己投入は高いが過去の危機は低い場合には権威受容型に, 現在の自己投入は低いが将来の自己投入希求は高い場合はモラトリアム型に, 現在の

2) 因子分析の結果, 現在の自己投入は「私は今, 自分の目標をなしとげるために努力している」「私には, 特にうちこむものはない」「私は, 自分がどんな人間で何を望み行おうとしているのかを知っている」「私は, 「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない」の 4 項目だった。過去の危機は「私は, 自分がどんな人間なのか, 何をしたいのかということ, かつて真剣に迷い考えたことがある」「私は, 親やまわりの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない」「私は以前, 自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある」の 3 項目だった。将来の自己投入希求は「私は, 環境に応じて, 何をすることになっても特にかまわない」「私は, 自分がどういう人間であり, 何をしようとしているのかを, 今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている」の 2 項目だった。

3) 加藤 (1983) のデータでは, 各下位尺度の平均値は現在の自己投入が 17.2 ( $SD=3.3$ ), 過去の危機が 17.8 ( $SD=3.1$ ), 将来の自己投入希求が 17.5 ( $SD=3.1$ ) であり, 本研究の因子分析による項目削除前の平均値は, 現在の自己投入が 16.6 ( $SD=4.1$ ), 過去の危機が 17.9 ( $SD=3.3$ ), 将来の自己投入希求が 16.5 ( $SD=3.1$ ) となり, 加藤 (1983) と比べてやや得点は低いが標本に顕著な違いはなく, 中央値による同一性地位の判定は可能と判断した。

**Table 1** 同一性地位による回想と適応指標の平均値、標準偏差および  $F$  値

適応指標	同一性達成型	権威受容型	モラトリアム型	同一性拡散型	全体	$F$ 値	多重比較
回想の頻度	20.31 (3.84)	18.21 (4.41)	19.76 (3.94)	18.67 (4.70)	19.24 (4.29)	2.54	
肯定的回想	16.80 (5.46)	17.96 (4.99)	17.19 (4.73)	16.82 (5.59)	17.18 (5.20)	0.52	
否定的回想	23.08 (5.86)	20.46 (5.56)	23.68 (4.47)	21.88 (6.12)	22.23 (5.67)	3.00*	権威受容<モラトリアム
再評価傾向	47.20 (8.39)	44.96 (8.59)	45.21 (6.84)	42.39 (7.66)	44.95 (8.07)	3.08*	同一性拡散<同一性達成
精神的健康	66.32 (13.14)	62.88 (10.93)	70.76 (12.04)	65.06 (13.54)	66.11 (12.69)	3.14*	権威受容<モラトリアム
自尊感情	33.34 (6.70)	34.37 (6.92)	28.90 (7.60)	29.02 (7.29)	31.47 (7.48)	7.45***	同一性拡散, モラトリアム <同一性達成, 権威受容

括弧内は標準偏差。多重比較は Tukey 法による。精神的健康の得点の高さは健康度の低さを示す。 $df=3,186$ , \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

自己投入と将来の自己投入希求がいずれも低い場合には同一性拡散型に分類した。調査協力者は同一性達成型 51 名（男性 17 名，女性 34 名），権威受容型 48 名（男性 13 名，女性 35 名），モラトリアム型 42 名（男性 15 名，女性 27 名），同一性拡散型 49 名（男性 17 名，女性 32 名）に分類された。

同一性地位による回想の特徴と心理的適応の違いを検討するため，同一性地位を独立変数とする 1 要因の分散分析を，調査で用いた他の指標に対して行った。Table 1 には各指標の平均値，標準偏差および  $F$  値を示した。

調査協力者全体の回想の頻度の平均は 19.24 ( $SD=4.29$ ) であり，野村・橋本 (2001) における老年群の平均（老年女性群；18.66 ( $SD=4.73$ )，老年男性群；19.12 ( $SD=4.19$ )) と比較しても回想の頻度に世代差は認められず，青年期と老年期では日常的に同程度に回想が行われていると考えられた。分散分析の結果，同一性地位による違いが否定的回想で認められ ( $F(3,186)=3.00$ ,  $p<.05$ )，Tukey 法による多重比較より，権威受容型よりもモラトリアム型でより多くの否定的回想が認められた。この結果は過去に危機を経験しなかった（権威受容型）か，今まさに危機を経験している

（モラトリアム型）かの違いを反映していると考えられた。また同一性地位による違いが再評価傾向でも認められ ( $F(3,186)=3.08$ ,  $p<.05$ )，多重比較の結果，拡散型よりも達成型で過去を再評価する傾向が高かった。この結果は危機を経験し，おそらく現在では危機を克服しつつある同一性達成型の特徴に一致した。モラトリアム型は不安や葛藤などの心理的苦痛の程度が高い一方で，権威受容型は心理的苦痛の程度が低いことが指摘されているが (Marcia, 1967; Marcia & Friedman, 1970)，適応指標では，精神的健康度 ( $F(3,186)=3.14$ ,  $p<.05$ ) と自尊感情 ( $F(3,186)=7.45$ ,  $p<.001$ ) の両方で違いが認められ，権威受容型よりもモラトリアム型で精神的健康度が低く，達成型と権威受容型はモラトリアム型や拡散型と比べて自尊心が高いことが認められた。

回想の頻度は同一性達成型，モラトリアム型，同一性拡散型，権威受容型の順に高かったが，分散分析の結果は有意ではなかった。このため，同一性達成地位でもっとも頻繁な回想が認められる可能性は統計的に認められなかった。なお，本研究ではいずれの指標でも同一性達成型と権威受容型との有意な違いは認められなかった。

次に測定した各指標間での相関係数を算出した

**Table 2** 回想, 同一性地位および適応指標間の相関係数

	回想の頻度	肯定的回想	否定的回想	再評価傾向	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入希求	精神的健康
肯定的回想	.069							
否定的回想	.346 ***	-.396 ***						
再評価傾向	.016	.242 **	-.104					
現在の自己投入	.018	.029	-.021	.197 **				
過去の危機	.289 ***	-.113	.324 ***	.122	.122			
将来の自己投入希求	.103	-.002	.176 *	.116	.384 ***	.275 ***		
精神的健康	.408 ***	-.137	.459 ***	-.071	-.136	.356 ***	.180 *	
自尊感情	-.266 ***	.071	-.316 ***	.142	.367 ***	-.191 **	.180 *	-.519 ***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

(Table 2 参照)。回想の頻度は肯定的回想とは相関せず、否定的回想とは有意な相関を示した。そのため日常場面で頻繁に回想する者は、より多くのネガティブな感情が回想に伴うと考えられた。この結果は老年者を対象とした野村・橋本(2001)の結果と一致し、青年期と老年期に共通する日常的回想の特徴と考えられた。

同一性地位の下位尺度のうち、過去の危機は回想の頻度や否定的回想と有意な正の相関を示した。その一方で、現在の自己投入は再評価傾向とのみ弱い相関を示し、回想の頻度や否定的回想とは相関しなかった。このため、同一性地位達成の条件のうち主に過去の危機が回想と関連し、青年が過去の危機をかつて経験、または今まさに経験している場合には、同時にネガティブで頻繁な回想が行われる可能性が示唆された。

適応指標に関しては、回想の頻度と否定的回想がそれぞれ精神的健康度や自尊感情度と有意な相関を示したが、肯定的回想は関連しなかった。そのため、青年期におけるネガティブな回想は心理的適応の低さと関連するものの、ポジティブな回想は心理的適応とは関連しないと考えられた。

また、現在の自己投入は自尊感情の高さと関連を示したが、過去の危機は反対に精神的健康の低さや自尊感情の低さと関連し、同一性地位の指標はそれぞれ適応指標と異なる関連を示した。

## 研究 2

### 目的

研究 2 の目的は、青年期に日常的に行われる回想が心理的適応を高める効果をもつかどうかを検討することとした。

研究 1 では回想と心理的適応の指標間で有意な相関が認められ、回想の頻度やネガティブな感情を伴う回想の程度と心理的適応の低さが関連する可能性が示唆された。しかしながらこの結果は両者の因果関係を示唆するものではなく、特定の時点における質問紙調査のみからでは、青年期の回想が心理的適応に及ぼす影響を検討することはできない。

そのため研究 2 では、先行研究（例えば Watt & Cappeliez, 2000）を参考に、回想の効果が持続する期間として 3 ヶ月間を設定し、研究 1 の調査協力者に対して 3 ヶ月後に再び質問紙調査を実施して、回想と心理的適応がその後のそれぞれの指標に及ぼす影響について縦断的な検討を試みた。

本研究では以下の 2 つのパス解析を行った。

第 1 のパス解析は、同一性地位が回想および心理的適応に及ぼす影響を仮定した上で、これらの影響を縦断的に検討するために行った。研究 1 の結果からは、過去に経験した危機は、青年期の頻繁でネガティブな感情を伴う回想を高める可能性が推測できる。また現在の自己投入や過去の危機

の有無は、その後の精神的健康度や自尊感情度の低下を導く可能性がある。

第2のパス解析は、回想と心理的適応との因果関係を検討するために行った。これまでは回想が心理的適応に効果があることを指摘した研究（例えば Haight & Dias, 1992; Ando, 2003）ばかりでなく、現在の感情状態が想起内容に影響を及ぼす気分一致効果（例えば伊藤, 2000）があることも指摘されており、回想と適応とがお互いに影響を及ぼしあう可能性がある。そこで両者の因果関係を検討するにあたっては、Finkel (1995) の交差遅れ効果モデル (Cross-lagged effect model) を用いたパス解析を行った。この方法では、研究者がこれまでの知見に基づいて因果の方向性を任意に定めるのではなく、第1回調査時の回想が第2回調査時の心理的適応に及ぼす影響と、第1回調査時の心理的適応が第2回調査時の回想に及ぼす影響の大きさを同時に比較することで、いずれの変数がもう一方により大きな影響力をもつのかを検討することができる（例えば岡林・杉澤・岸野, 1998）。これらの分析から、同一性地位が回想と心理的適応それぞれに及ぼす影響を考慮した上で、回想と心理的適応間の相互的な因果関係について検討を試みた。

## 方法

**調査協力者** 研究1で質問紙に回答した学生を対象に、その3ヶ月後に追跡調査を依頼し、いずれの調査にも回答した者を分析の対象とした。調査協力者は大学生群64名、看護学校群43名、専門学校群49名で、合計156名（男性45名、女性111名、平均年齢21.6歳、標準偏差2.9歳）だった。研究2における有効回答率は、研究1の調査協力者のうちの82.1%だった。

**手続き** 研究1と同じく講義時に質問紙を配付し、1週間後に回収した。

**質問紙** 研究1で用いた尺度のうち、同一性地位判定尺度（加藤, 1983）をのぞく全ての指標を用いた。

## 結果と考察

はじめに同一性地位の指標が3ヶ月後の回想の特徴や心理的適応に及ぼす影響をパス解析により検討した。同一性地位が回想と適応指標のそれぞれに影響を及ぼすという因果モデルを仮定し、同一性地位の判定基準である、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入希求を含む第1回調査の全ての指標を外生変数とし、第2回調査の回想指標および精神的健康度と自尊感情度を内生変数として用いた。分析には統計パッケージのAmos (ver. 5) を用いた。

同一性地位から回想指標に対しては、現在の自己投入から回想頻度へのパスが有意傾向を示したが ( $\beta = -.114, p < .10$ )、全般的に有意なパスは認められなかったため、以降の分析では回想指標を除外した。

また精神的健康度に対しては、将来の自己投入希求からのパスが有意傾向を示し ( $\beta = .134, p < .10$ )、第1回調査の自尊感情度による有意な負のパスが認められた ( $\beta = -.186, p < .05$ )。第2回調査の自尊感情度に対しては、現在の自己投入からの有意な正のパス ( $\beta = .117, p < .05$ ) および過去の危機からの有意な負のパス ( $\beta = -.125, p < .05$ ) が認められた。第1回調査から第2回調査への精神的健康度 ( $\beta = .429, p < .001$ ) と自尊感情度 ( $\beta = .750, p < .001$ ) には、いずれも有意な正のパスが認められた (Figure 1 参照)。

この結果より、現在の自己投入の程度が高く、過去の危機の程度が低いことは自尊感情を高め、将来の自己投入希求が高いことは精神的健康を悪化させる可能性が認められた。さらに、自尊感情の高さは精神的健康を改善させると考えられた。

研究1で認められた相関関係とは一致せず、同一性地位と回想の指標には概して有意な影響は認められなかった。そのため同一性地位は概して回想の特徴に影響しないと考えられた。

次に、回想と心理的適応との因果関係を検討するため、Finkel (1995) の交差遅れ効果モデルによ

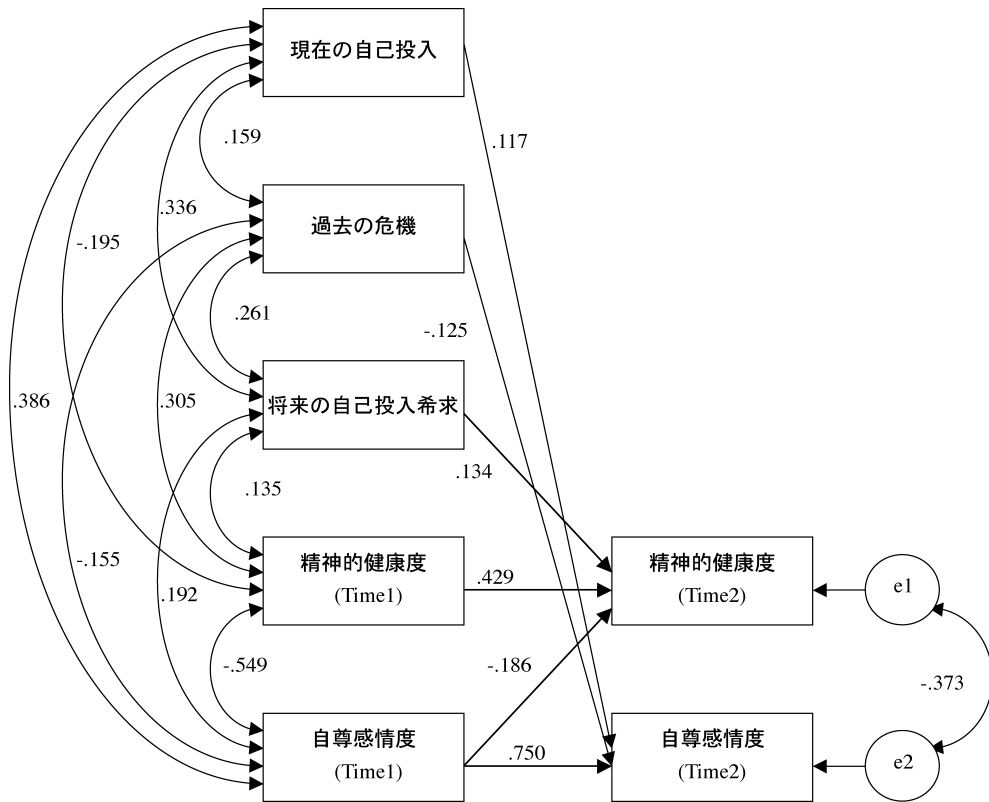


Figure 1 同一性地位から心理的適応へのパスダイアグラム  
Time1, Time2 はそれぞれ第 1 回および第 2 回調査時の得点を示す。

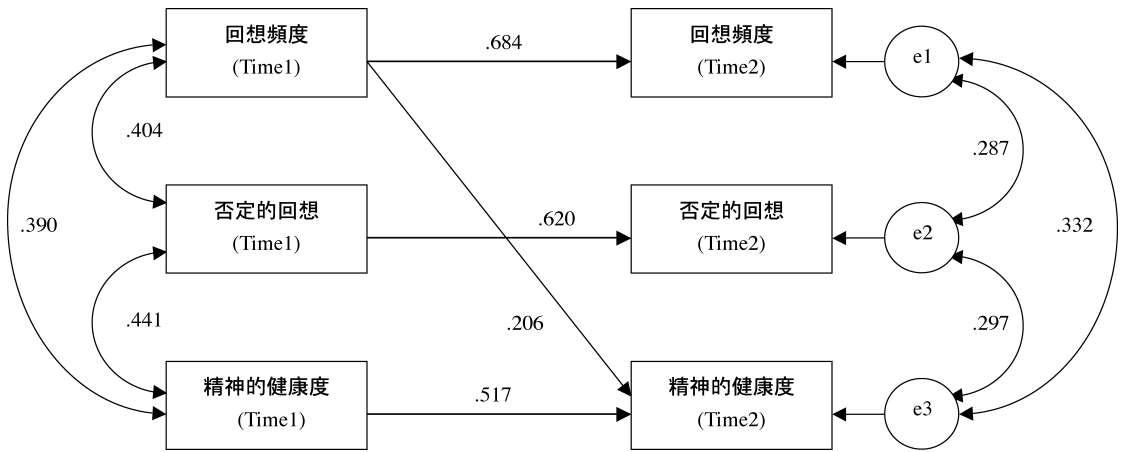
るパス解析を行った。分析にあたっては、回想の頻度と否定的回想で適応指標と有意な相関が認められた研究 1 の結果から、第 1 回および第 2 回調査時それぞれの回想の頻度と否定的回想、そして精神的健康度と自尊感情度のいずれか一方を変数として選択した。精神的健康度と自尊感情度の間には中程度の相関が認められ ( $r = -.519$ )、分析結果に影響する可能性があるため、本研究ではいずれか一方を因果モデルに投入して分析を行った。

その結果、精神的健康度では、第 1 回調査時の回想の頻度から第 2 回調査時の精神的健康度への有意な正のパスが認められた ( $\beta = .206, p < .01$ )。その一方で、精神的健康度から回想の指標へのパスはいずれも有意ではなかった (Figure 2 参照)。また自尊感情度では、標準偏回帰係数の値は低い

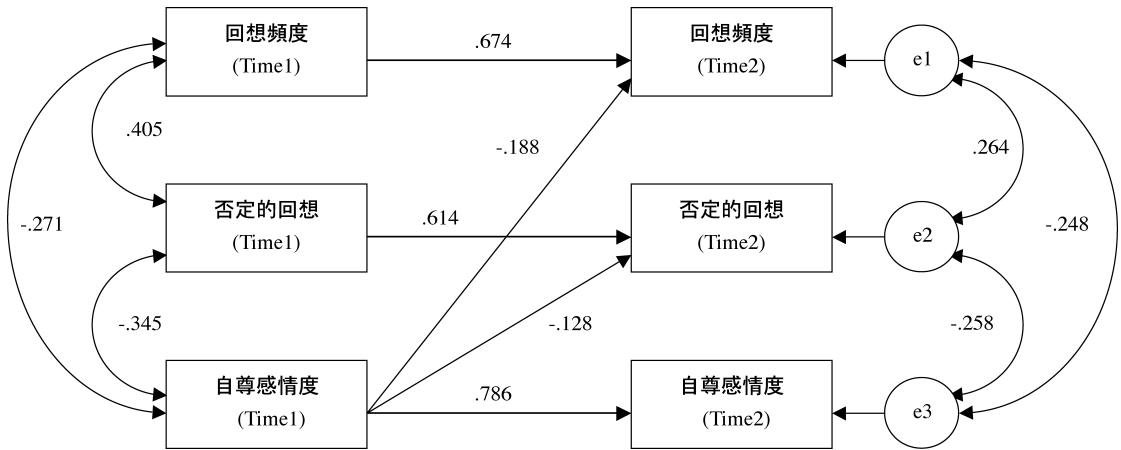
ものの、第 1 回調査時の自尊感情度から第 2 回調査時の回想の頻度と否定的回想への有意な負のパスが認められた (回想頻度:  $\beta = -.188, p < .01$ ; 否定的回想:  $\beta = -.128, p < .05$ ) (Figure 3 参照)。

これらの結果、精神的健康度では頻繁に回想することで精神的健康が悪化し、あまり回想をしないことで精神的健康が改善する可能性が認められた。その一方で自尊感情度では頻繁な回想による影響は認められず、反対に自尊感情の低さが回想の頻度や回想に伴うネガティブな感情を増加させ、自尊感情の高さがそれらを低下させる可能性が認められた。これまでも頻繁に過去を反芻することが非適応的な影響を及ぼすことが指摘されているが (Nolen-Hoeksema, 1991)、本研究では、頻繁な回想が精神的健康を悪化させるばかりでなく、





**Figure 2** 精神的健康度および回想の指標間のパスダイアグラム  
Time1, Time2 はそれぞれ第1回および第2回調査時の得点を示す。



**Figure 3** 自尊感情度および回想の指標間のパスダイアグラム  
Time1, Time2 はそれぞれ第1回および第2回調査時の得点を示す。

自尊感情が低いことが頻繁な回想を促進させる可能性が示された。しかしながら、有意なパスの方向が精神的健康度と自尊感情度で異なり、因果の方向性が一致しない理由については本研究では検討できなかった。

### 総合考察

研究1の結果より、青年期には同一性地位により日常的回想や心理的適応に異なる特徴が認められ、自我同一性の達成した青年はより頻繁な回想

を行うという可能性が認められた。同一性地位による違いは回想の頻度では有意ではないものの、過去の危機と回想の頻度、否定的回想との間に有意な相関が認められ、いくつかの重要な選択に思い悩む経験をした（またはしている）青年は、頻繁でネガティブな感情を伴う回想をより行う可能性が認められた。また、モラトリアム型は権威受容型よりもネガティブな回想の程度が高く、同一性達成型は同一性拡散型よりも再評価傾向が高かった。このことから、現在危機を経験している

モラトリアム型ではネガティブな感情を伴う回想が多く、過去に危機が経験された同一性達成型ではネガティブな出来事がより再評価されるという特徴が認められた。

これらの結果は、過去の自分の信念や信条を見直し、その解決に達しているという Marcia (1966) の同一性達成の特徴に合致するものであり、同一性が達成された青年は回想をより頻繁に行うとは言えないが、回想に伴って過去のネガティブな側面をより再評価していると考えられた。

研究2の結果からは、同一性地位が心理的適応に影響することが縦断的に確認されたが、同一性地位が回想の特徴に及ぼす影響は認められなかった。また回想と心理的適応の相互的な因果関係を検討した結果、頻繁な回想が精神的健康を低める一方で、自尊感情の低さが頻繁でネガティブな感情を伴う回想を増加させるという影響が認められた。このため青年期に日常的に行われる回想は心理的適応を高める効果をもつ可能性は、支持されなかった。

研究2の結果より、頻繁な回想が精神的健康度を低める影響が認められた。この結果は療法的回想のもつ心理的意義についての指摘 (Ando, 2003; Haight & Dias, 1992) とは一致しないものの、頻繁な日常的回想が心理的適応と負の関連を示すことはこれまで指摘されている (Brennan & Steinberg, 1984 ; 長田・長田, 1994)。この点について、回想研究では研究方法の違いにより異なる回想の側面が検討されるため (Thornton & Brotchie, 1987)、研究結果を比較する場合には、検討された回想のモダリティの違いを考慮する必要があることが指摘されている (野村・山田, 2004)。本研究では日常場面での頻繁な回想が適応状態を低める影響が認められたが、この結果は回想法のもつ療法的意義を疑問視するものではない。聞き手なしに行われる日常的な回想が非適応的な影響を及ぼし得ることは、換言すれば、療法場面で行われる回想法では援助的な聞き手の存在がその適応

的効果に重要な役割を果たしている可能性があると言える。

本研究では質問紙調査によって日常の様々な場面における回想の頻度を測定し、これを回想の量的指標として検討している。しかしながら、日常場面での回想は明確に意識されているとは限らず、吉田 (1995) が指摘するように、回想の頻度について回答することは調査協力者の内省能力を越えるかもしれない。

実際に、野村・橋本 (2000) はデイケアを利用する在宅高齢者に対してインタビュー調査を試み、本研究で用いた回想の指標について口頭での回答を求めた結果、日常的に回想を試みないと回答した高齢者は自身の回想について振り返ることが困難と思われる場合も少なからず認められた。また、高齢者の場合は記憶力などの点で今回の研究における青年期の場合とはやや異なるとは考えられるので、この測定法についてはさらに検討すべきだと考えられる。しかしながら、吉田 (1995) は、先の指摘と同時に、このような方法には限界があるかもしれないが、今後仮説を構築していく探索的な段階での研究に利用することには意義があると述べていることから、本研究における回想の測定方法も意義があると考えられる。

また、本研究で用いた日常場面での回想の頻度が本人にとってどのような意味を持つのかについても慎重に検討する必要がある。黒川 (2005) は、多くの人が過去を振り返るのは何かの節目の時期であり、日々の生活の中で過去を振り返る機会はありませんと述べている。この考えに従えば、個人が行う回想で重要なのは特定の「しるべき」時期に行った回想の深さや量などであり、日常的な回想の頻度や量とは異なると言える。本研究で用いた回想の量的指標は、個人が日常場面で自覚的あるいは意図的に回想を行う程度を測定しているとも考えられ、自覚されないものまでを含めた回想の頻度を反映しているとは言えないだろう。本研究は青年期の日常的回想を探索的に検

討しているものの、日常場面での回想をいかに測定し、それを個人の回想全体の中でどう位置づけるかについての検討は不十分であり、今後は実験法や面接法なども必要に応じて取り入れ、より妥当性の高い研究方法を検討する必要があると言える。

同一性地位と回想との関連については、研究1で有意な相関が認められたにもかかわらず、研究2では同一性地位が青年期の回想に及ぼす影響は認められなかった。このことから、重要な自己決定を迫られる危機を経験した青年は同時に頻繁な回想やそれに伴う心理的な苦痛を経験している一方で、そうした危機の経験が回想を促すとは言えない。例えば、これまでに経験した何らかの出来事が、その後も繰り返しネガティブな感情を伴って想起される一方で、そうした経験は自己を見つめ直し自己決定を行うための契機となる可能性がある。

この点に関して、本研究では同一性地位から回想という一義的な因果関係を仮定し、回想が同一性地位に及ぼす影響については検討していない。しかしながら、青年が自我同一性を確立するプロセスで回想を用いている可能性が指摘されており(長田・長田, 1994)、回想が同一性地位に影響を与える可能性も考えられる。Marcia (1976) は6年間にわたる縦断研究より、以前とは異なる同一性地位に変化する場合もあることを認め、青年期に限定されない進行中のプロセスとして同一性地位を考察するべきだと考えた。また岡本 (1985, 1994) は、アイデンティティは青年期以降にも繰り返し問い直されて再体制化されると考え、アイデンティティが螺旋構造を描きながら発達して成熟するモデルを提唱している。

これらの指摘より、同一性の確立が青年期以降も続く心理的課題だと言えるならば、個人の行う回想が自我同一性の達成に及ぼす影響について検討することは、成人期以降の心理社会的発達という観点からも重要だと言えるだろう。その上で、

青年期や老年期といった個々の発達段階に限定しない、ライフサイクル全般における回想の意義について検討することが可能となるだろう。

#### 引用文献

- Ando, M. (2003). The effects of short- and long-term life review interview in the psychological well-being of young adults. *Psychological Reports*, **93**, 595-602.
- Brennan, P. L., & Steinberg, L. D. (1984). Is reminiscing adaptive?: Relations among social activity level, reminiscence and morale. *International Journal of Aging and Human Development*, **18**, 99-110.
- Butler, R. N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, **26**, 65-75.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.  
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Finkel, S. E. (1995). *Causal analysis with panel data*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Haight, B. K., & Dias, J. K. (1992). Examining keyvariables in selected *reminiscing modalities*. *International Psychogeriatrics*, **4**, 279-290.
- 伊藤美加 (2000). 自己関連的情報処理における気分一致効果——自伝想起課題による検討—— 心理学研究, **71**, 281-288.
- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 292-302.
- 黒川由紀子 (2005). 回想法: 高齢者の心理療法 誠信書房
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Marcia, J. E. (1967). Ego identity status: Relationship to change in self-esteem, "general maladjustment", and authoritarianism. *Journal of Personality*, **35**, 1, 119-133.
- Marcia, J. E. (1976). Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth & Adolescence*, **5**, 145-160.
- Marcia, J. E., & Friedman, M. L. (1970). Ego identity status in collegewomen. *Journal of Personality*, **38**, 249-263.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本語版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- Neimeyer, G. J., & Metzler, A. E. (1994). Personal identity and autobiographical recall. In U. Neisser, & R. Fivush (Eds.), *The remembering self*. Cambridge: Cambridge

- University Press. pp. 105–135.
- Nolen-Hoeksema, S. (1991). Responses to depression and their effectson the duration of depressive episodes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 569–582.
- 野村信威・橋本 宰 (2000). 高齢者における回想の質と適応との関連について (6) 日本心理学会第 64 回大会発表論文集, 991.
- 野村信威・橋本 宰 (2001). 老年期における回想の質と適応との関連 発達心理学研究, **12**, 75–86.
- 野村信威・橋本 宰 (2006). 地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み 心理学研究, **77**, 32–39.
- 野村信威・山田富美雄 (2004). 高齢者に対する回想法の効果評価研究の展望—— Evidence Based Medicine (実証に基づく医療) の観点から—— ストレスマネジメント研究, **2**, 71–78.
- 野村豊子 (1998). 回想法とライフレビュー 中央法規出版
- 岡林秀樹・杉澤秀博・岸野洋久 (1998). お年寄りの健康と人とのふれあい——縦断研究の意味するもの—— 豊田秀樹 (編) 共分散構造分析 [事例編] 構造方程式モデリング 北大路書房 pp. 83–90.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 295–306.
- 岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房
- 長田由紀子・長田久雄 (1994). 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, **5**, 1–10.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 鎌幹八郎・山本 力・宮下一博 共編 (1984). アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版
- Thornton, S., & Brotchie, J. (1987). Reminiscence: A critical review ofthe empirical literature. *British Journal of Clinical Psychology*, **26**, 93–111.
- 植之原薫 (1993). 同一性地位達成過程における『事象の記憶』の働き 発達心理学研究, **4**, 154–161.
- Watt, L. M., & Cappeliez, P. (2000). Integrative and instrumental reminiscence therapies for depression in older adults: Intervention strategies and treatment effectiveness. *Aging & Mental Health*, **4**, 166–177.
- Webster, J. D. (1993). Construction and validation of the ReminiscenceFunction Scale. *Journal of Gerontology*, **48**, 256–262.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造教育心理学研究, **30**, 64–68.
- 吉田寿夫 (1995). 学校教育に関する社会心理学的研究の動向：研究法についての提言を中心にして 教育心理学年報, **34**, 74–84.
- 2004. 12. 8 受稿, 2006. 2. 17 受理—

## Reminiscence, Identity Status and Well-being in Young Adults

Nobutake NOMURA<sup>1</sup> and Tsukasa HASHIMOTO<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences

<sup>2</sup>Department of Psychology, Doshisha University

The JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 15 No. 1, 20–32

Reminiscence therapy for the elderly has drawn considerable attention. However, it is suggested that adolescent also frequently reminisce. This study examines the relationship between daily reminiscence and identity status (Marcia, 1966) in adolescence. A reciprocal causal relationship between reminiscence and well-being is tested. Ninety-three university students, 45 nursing school students, 52 vocational school students (62 male and 128 female, mean age 21.5 years) answered a set of questionnaires which include the Identity Status Scale (Kato, 1983), Reminiscence Scale (Osada & Osada, 1994), Positive and Negative Reminiscence Scale, Reevaluation Tendency Scale (Nomura & Hashimoto, 2001), the Japanese version of GHQ28 (Nakagawa & Daibo, 1985) and Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1965). Results indicate that frequency of reminiscence and negative reminiscence has a positive correlation with the identity crisis. However, results of Cross-lagged path analyses show that the crisis did not predict how much the person reminisces about his or her past. As assessed by GHQ, results also indicate that frequent reminiscing predicted higher levels of psychological disorders, while lower levels of self-esteem encourage frequent and negative reminiscence.

**Key words:** reminiscence, identity status, young adult, cross-lagged effect model